

新冠にまつわるお話しを集めた 新冠百話

第十八話

「エゾオオカミと新冠牧馬場」(要約文)

動物作家として知られる戸川幸夫氏が書いた『さいごのおおかみ』と題する児童書があります。この本は新冠牧馬場で馬の群れを襲ったエゾオオカミの撲滅についての物語です。オオカミは開拓使の有害動物として駆除され絶滅してしまいました。今回は、エゾオオカミの歴史についてふれてみたいと思います。

エゾオオカミは、ヒグマとともに北海道では大形の哺乳動物に属します。現在のアラスカやカナダに生息するオオカミの生息は、家族で群れをつくるシカ類を主食とした雑食で、森林の奥に住み、めつたに人と出会うことはないようです。アイヌ民族にとってエゾオオカミは、「ホロケ」「セタカムイ」などと呼ばれ、自然界の神として崇められていました。

明治時代以降、拓殖計画による移民の居住拡大のため、森林伐採や石炭、金などの地下資源開発によって自然が失われ、エゾオオカミの生息地がしだいにおよびやかされてきました。主食としていたエゾシカは、開拓使によって大量に捕獲され、千歳的美々で缶詰にされたこと、大雪によるエゾシカの減少などから、オオカミは民家近くの家畜などをねらうようになり、新冠牧馬場で

は馬の被害がでたことから有害動物とされてしまいました。全道的に見ても、オオカミは報奨金の対象となり、多数駆除されました。新冠の牧場指導にあたったアメリカ人のエドウィン・ダンは、サンフランシスコから猛毒ストリキニーネを取り寄せ、明治12年頃に肉をつけておびき出し、大量に駆除しました。このことについて後に新冠名譽町民となった浅川義一氏によれば、父である繁氏から聞いた話として、慈悲深いダンがオオカミを供養するための塚を牧場内に設けたといえます。しかし、その塚の場所はいまだ不明なままとなっています。

北海道に生息したエゾオオカミは、その生態も謎のまま絶滅してしまいました。私たちの生活を脅かす動物は、一方的に有害として駆除することは自然界から見ると不合理なのかもしれません。オオカミの絶滅によってエゾシカが繁殖し、作物に被害があることも考えられます。これからは共存の道を考え、自然保護の立場を考えていくことも大切です。私たちは昔のアイヌ民族と同様に、自然とともに生きていくことを忘れてはいけないと思います。



新冠はエゾオオカミの絶滅最後の地という言い伝えがあります。郷土資料館にはオオカミの彫像を展示しています。

～火災から命を守ろう！ストーブ火災にご注意を！！～

- ・つけたまま就寝しない！
- ・ストーブの周囲で洗濯物を乾かさない！
- ・使用中の給油は絶対しない！

消防署新冠支署

火災・救急出動状況		() かつこ内は前年同期	
区分	火災件数	救急件数	
10月	0件 (0件)	20件 (29件)	
元年1～10月	4件 (1件)	276件 (259件)	
交通事故発生状況		() かつこ内は前年同期	
区分	発生件数	死者	傷者
10月	1件 (0件)	0人 (0人)	2人 (0人)
元年1～10月	7件 (4件)	0人 (0人)	9人 (5人)

人のうごき

(令和元年10月末現在)

人口	5,506人	(前月比 - 6人)
男	2,701人	(前月比 - 3人)
女	2,805人	(前月比 - 3人)
世帯	2,777世帯	(前月比 - 1世帯)

町公式ホームページ

町公式フェイスブック

